

赦すということ

柊 暁 生

はじめに

本日は多文化関係学会北海道・東北地区研究会と藤女子大学キリスト教文化研究所とののはじめてのジョイント研究会で、「赦すということ」と題してお話させていただきます。多文化関係は言ってみれば他文化との関係をいかに構築するかが大きな問題と考えられ、そこには人間同士の衝突や対立が避けられない事態として生じてきます。それゆえに相互の関係で結ばれる契約や法律が効果的な役割を果たすわけですが、赦すということもある意味でそれ以上に人間関係を潤滑にし緩和するものがあります。そこで、聖書がどのように赦すことを言っているのか、それについてご一緒に考えてみたいと思います。宗教的には当然人間に対する神の赦しの問題がかかわってくるのですが、今日は特に人間同士がお互いに赦しあっていかなければならないということに焦点を当てて話させていただきます。

I 旧約聖書における争い

1. 「目には目を，歯には歯を」

(1) 旧約聖書

「目には目を，歯には歯を」という一般によく知られている言葉は旧約聖書の中に出てきます。「もし，その他の損傷があるならば，命には命，目には目，歯には歯，手には手，足には足，やけどにはやけど，生傷には生傷，打ち傷には打ち傷をもって償わねばならない。」(出エジプト記 21 章 23-25 節)

「目には目を，齒には齒を」の前には「命には命を」とあり，後には「手には手を，足には足を，～」とありますが，人口に膾炙しているのは，「目には目を，齒には齒を」という文言です。人が殴り合いをすれば，ふつうは頬を殴ると思うのですが——ですからイエスは「右の頬を殴られたなら，左の頬を向けよ」（マタイ5章）と言っています——，鼻をへし折るとも言われず，なぜか殴られる箇所が目と齒になっています。出エジプト記以外のレビ記，申命記にも「目には目，齒には齒」の表現は出てきます。

(2) ハムラビ法典

ただ，この「目には目を，齒には齒を」の文言は，おそらく紀元前18世紀末メソポタミアのハンムラビ法典，あるいはそれに関連する法律に起源があると考えられます。どのようにして伝わったかは明白ではありませんが，聖書の「目には目を，齒には齒を」に相当するハンムラビ法典の表現は次のようなものです。

「§ 196 もしアウィールムがアウィールム仲間の目を損なったなら，彼らは彼の目を損なわなければならない。」

「§ 200 もしアウィールムが彼と対等のアウィールムの齒を折ったなら，彼らは彼の齒を折らなければならない。」¹

これは同害報復法，あるいはタリオ (talio) の法と言われるものです。残酷と思われるかも知れませんが，これは倍返しのような報復を禁じた法律で，ある意味ですんだ社会の正義の法です。ハンムラビ法典の石碑の上部には太陽神シャマシュがハンムラビ王に法典を授ける図があり，太陽はくまなく世界を照らし，真実を明らかにするところから，正義の象徴であり，法典は正義をあらわすものです。法典の最後にも，「私の正義が国土に明らかになるように」と書かれていますから，王は正義の実現者でなければならぬわけです。人間には元来，正義と平等の感覚がそなわっており，子供のけんかなどを見ていると，三回殴られた

¹ 『ハンムラビ「法典」』（中田一郎訳，第2版，リトン 2002年）アウィールムとはある社会層の人々のこと。同書91ページ参照。他に旧約聖書との関係に関しては同書200-201頁参照。

から三回殴り返すというようなことをしたりしますが、これは人間に自然に備わっている正義感によるものと思われます。日本語の「仕返し^{しかえ}」は「する+かえす」で、やられた相手に同じことをやり返すことです²。

同害報復法は、目をやられたら目だけやりかえしてもいいが、それ以上はするな。歯を折られたら、歯を折り返してはいいがそれ以上はしてはいけない、と言っています。法律家はここには現今の罪刑法定主義が意図されていると考えているようです。

旧約聖書の「目には目を、歯には歯を」ということに対して、新約聖書には次のようなイエスの言葉があります。「あなたがたも聞いており、目には目を、歯には歯をと命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。～」

ハンムラビ法典 § 196～	[旧約] 出エジプト記 21 章	[新約] マタイ 5 章
<p>§ 196 もしアウィールムがアウィールム仲間の目を損なったなら、彼らは彼の目を損なわなければならない。</p> <p>§ 200 もしアウィールムが彼と対等のアウィールムの歯を折ったなら、彼らは彼の歯を折らなければならない。</p>	<p>23 節 もし、その他の損傷があるならば、命には命、</p> <p>24 節 目には目、歯には歯、手には手、足には足、</p> <p>25 節 やけどにはやけど、生傷には生傷、打ち傷には打ち傷をもって償わねばならない。</p>	<p>38 節 あなたがたも聞いており、「目には目を、歯には歯を」と命じられている。</p> <p>39 節 しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。</p>

² 「仕返し」は英語では“pay back”で、pay (払う)+back (もとに) から成り、借りましたお金を返す、返済することが元来の意味。

2. カインとアベル — 兄弟の争い —

旧約聖書に有名な「カインとアベル」の兄弟の争いの物語があります。人類最初のアダムとエヴァの息子であるカイン（兄）がアベル（弟）を殺すという人類最初の殺人です。兄は農耕を、弟は牧畜を営んでおり、ここには農耕文化と牧畜文化との衝突、異文化の対立があったのかも知れません³。同じような話は『古事記』にもあり、海幸彦（兄）と山幸彦（弟）の対立の物語は、カインとアベルの物語に非常によく似ています。兄は漁師、弟は猟師で職業的・文化的対立があったことは容易に考えられます。また、隼人族（兄）と天孫族（弟）の部族的対立も想定されま

す。

二つの物語が大きく異なる点は、カインとアベルの場合には神が介入し、海幸彦と山幸彦の場合には海神の娘がある役割を果たすということです。カイン（兄）はアベル（弟）殺し、神から咎められますが、山幸彦（弟）は豊玉姫に助けられ、最後には海幸彦（兄）を従わせます。

アベルを殺したのち、カインは人からの復讐をおそれます。「今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまうえば、わたしに会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」（創世記4章14節）

物語の設定では、ほかに父母のアダムとエヴァしかいないのでおかしな話ですが、これは復讐はいけませんよと禁じるために、後の時代に挿入された文言と思われる。神はカインを殺す者は七倍の復讐を受けると言い（同15節）、また、カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍（同24節）と言われています。ここで、復讐が七という数であらわされていますが⁴、のちに述べるように新約聖書では赦しが七という数であらわされています。

³ シュメールにも「ドゥムジとエンキムドゥ」という牧羊神と農耕神の物語がある。

⁴ レメク（ノアの父親）の年が777歳（創世記5章31節）というのはこの数字をもとにして象徴的に書かれている。

II 旧約聖書における赦し — 二つの例 —

1. ヨセフとその兄弟（創世記）

創世記の終わり、37章から50章にかけて壮大なヨセフ物語があります。ヤコブの11番目の息子ヨセフは兄弟たちから妬まれ、殺されるのは免れながらもエジプトに売られてゆきます。彼はそこで偉くなって飢饉のときにエジプトにやってきた兄弟と遭遇しますが、復讐はせずに兄弟を赦します。これは感動的な物語で、クライマックスはヨセフが兄弟につきのようという場面です。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。」（創世記45章5節）

ヨセフはまた次のようにも言います。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。」（同50章20節）

ヨセフは兄弟に復讐せずに赦します。実際は兄弟に売られているのに、それは神が皆が助かるようにと仕組まれたことだと解釈します。ここには事実を解釈するというのはどういうことかという大きな問題があります。

2. 負債免除の年（申命記）

申命記15章には七年目ごとの負債の免除の記事があります。「七年目ごとに負債を免除しなさい。負債免除のしかたは次のとおりである。だれでも隣人に貸した者は皆、負債を免除しなければならない。同胞である隣人から取り立ててはならない。主が負債の免除の布告をされたからである。外国人からは取り立ててもよいが、同胞である場合は負債を免除しなければならない。」（申命記15章1-3節）

旧約聖書のこの箇所がもともととなって、現在では開発途上国などから「債務帳消し」が言われています。1990年にアフリカキリスト教協議会が提言し、1994年に教皇ヨハネ・パウロ二世が「紀元2000年の到来」において、2000年を Jubilee の年 — レビ記25章のヨベルの年に由来する — として先進国の政府に対し債務の帳消しを呼びかけたことに始まります。

帳消ししないまでも大幅に削減することを求めています。「貧困や社会の底辺に取り残された人を見よ。借金があまりに多すぎ、返済などかなわない。西暦2000年の祝いの年には、債務の軽減、もしくは帳消しが最も好ましい。」とヨハネ・パウロ2世は2000年7月の沖縄サミットを前にして、途上国の求める債務削減を呼びかけました。

このほか旧約聖書には、「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」(レビ記19章18節)という言葉があり、これは新約聖書のイエスの教えにつながります。

また、「復讐する者は、主から復讐を受ける。主はその罪を決して忘れることはない。隣人から受けた不正を赦せ。そうすれば、願い求めるとき、お前の罪は赦される。人が互いに怒りを抱き合っているながら、どうして主からいやしを期待できようか。自分と同じ人間に憐れみをかけずにいて、どうして自分の罪の赦しを願いえようか。」(シラ書28章1-4節)とも言われています。

カインとアベルの物語では、復讐が七倍、七の七十七倍と言われおり、負債免除は七年目と述べられ、七という数が復讐と負債免除の両方で使われています。これは旧約聖書でのことですが、新約聖書には赦しが七という数を使って説かれている箇所があります。聖書では、復讐に関しても赦しに関しても、七あるいは七の倍数が使われています。

III 新約聖書における赦し ― 二つの例 ―

1. 何回赦すべきか：七の七十倍 (マタイ福音書)

マタイ福音書では一番弟子のペトロがイエスに兄弟同士の赦しについて尋ねています。

「そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。『主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。』イエスは言われた。『あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。』」(マタイ18章21-22節)

これはカインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍と述べる創世記4章に対立して書かれていると考えられます。

2. 何回赦すべきか：七回（ルカ福音書）

マタイ18章に対応するルカ17章ではイエスが弟子たちに語られた形式になっています。

「あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」（ルカ17章3-4節）

マタイは七の七十倍と言い、ルカは七回と述べています。倍数の違いはありますが、基本的にはおなじ七という数を使っています。ほかにも、イエスの系図に関して、マタイ1章はアブラハムからイエスまでくだって $14(7 \times 2) \times 3 = 42$ 代としていますが、ルカ3章はイエスからアダムまでさかのぼって $7 \times 11 = 77$ 代としており、倍数の違いはありながらも、やはりどちらも七の倍数で書いている箇所があります。

聖書では、復讐に関しても赦しに関しても、七という数が使われているのはなぜなのでしょう。それは聖書の中で七が聖なる数であり、ある意味で完全な数として用いられているからであると考えられます。復讐は言ってみれば人間関係においてバランスを保つ正義(?)であるわけですが、赦しはそれ以上に人間関係を完全に結びつけるものとしてあるからではないかと思えます。

[旧約] 創世記 4 章 15 節	[新約] マタイ 18 章 21-22 節	[新約] ルカ 17 章 3-4 節
<p>主はカインに言われた。「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」</p> <p>24 節 「カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍。」</p>	<p>そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」イエスは言われた。「あなたに言っておく。七回どころか七の七十倍までも赦さない。」</p>	<p>あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、「悔い改めます」と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。</p>
7 → 77	7 → 7×70	7 → 7

ところで、マタイ福音書の「七の七十倍」赦す話の続きには、赦すことをわかりやすく理解させるためのたとえ話があります。

IV 赦すことのたとえ話

1. 「仲間を赦さない家来」のたとえ (マタイ 18 章 21-35 節)

さて、マタイ 18 章の七の七十倍兄弟赦す話には「赦すこと」のたとえが続いています。イエスはどのようにして兄弟を赦さないといけないのかをわかりやすく「仲間を赦さない家来」のたとえをもって説明します。これは天の国に入る必須条件のようなものとして言われています。

「そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕ま

えて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不屈きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。』

マタイ 18 章には「七の七十倍」赦すことをわかりやすく説明する「仲間を赦さない家来」のたとえがありますが、これに対応するルカ 17 章の「七回」赦すことの話のあとにはたとえがありません。ルカ福音書においては、赦しをわかりやすく説明するたとえは、罪深い女を赦す出来事のあとにおかれています。「金貸し」のたとえで、イエスが罪深い女を赦されたことを訝いぶかしがった人に、多く罪を赦された者は多く愛すると説明するために語られたものです。

2. 「金貸し」のたとえ（ルカ 7 章 36-50 節）

『ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。』シモンは、『帳消しにしてもらった額の多い方だと思います』と答えた。イエスは、『そのとおりだ』と言われた。～以下略』

「仲間を赦さない家来」のたとえと「金貸し」のたとえは、どちらも借金の返済に関してその帳消しが問題となっています。マタイでは一万タラントンの借金を帳消しにされた者は、自分に百デナリオンの借金ある者に対して当然それを帳消しにすべきではないかと言われています。それに対し、ルカでは両方とも借金が帳消しにされていますが、どちらの

方がより多く金貸しに感謝するかと問われています。

どちらも借金の帳消しが問題になっていますが、微妙にニュアンスが異なります。

それは両者の文脈の相違によるものでもあり、マタイではイエスがペトロに対し、「七の七十倍」赦すことが大事だと言って、それから「仲間を赦さない家来」のたとえが語られているのに対し、ルカではイエスがシモンに対し、実際に罪深い女を赦したあとに、「金貸し」のたとえを話されています。

マタイ 18 章	イエス→ペトロ	赦しを勧告(七の七十倍) → 家来のたとえ
ルカ 7 章	イエス→シモン	赦しを实践(罪深い女) → 金貸しのたとえ

この二つのたとえは、赦しというのは借金の帳消しのようなものだと述べています。「目には目を、歯には歯を」の正義から言えば、一万円の借金がある者は一万円の借金を返済してこそバランスが取れた正義が確立されるわけです。一万円の借金はもう返さなくてもいいよというのは正義ではないでしょう。通常、世の中ではこんなことはないわけで、そのために借用証書、連帯保証人、担保などがあるわけです。正義は確立されなければならない、公平な社会が建設されなければなりません。

しかし、人間は神から見れば、借金ばかりしている存在で、神はその借金を帳消しにしているのだと聖書は言います。借金が帳消しにされているのだから、人間同士もお互いに借金を帳消しにしなければなりませんよと言っているようです。神と人との関係から、人と人との関係を説いているわけです。

しかしながら、この帳消しは正義ではなく、不正ではないでしょうか。一万円の借金は一万円が返済されてこそ天秤のバランスが取れるというものです。天秤の一方には一万円がのっけていて、他方には何ものっけていないのではバランスが取れません。

これをどのように理解したらいいのでしょうか。理解するための鍵になるのは、ルカ福音書にあるたとえではないかと思われますので、次にそれを見てみましょう。

3. 「不正な管理人」のたとえ（ルカ 16 章 1-13 節）

「イエスは、弟子たちにも次のように言われた。ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。」

この 16 章のたとえは、15 章の三つのたとえとある意味でつながっています。15 章には失ったものを再び見出すたとえが三つ続けて書かれています。最初が「見失った羊」、次が「無くした銀貨」、最後が「放蕩息子」のたとえです。これら三つのたとえは、最初が百分の一（羊、百匹のうち一匹を失う）、次が十分の一（銀貨、十枚のうち一枚を失う）、最後が二分の一（息子、二人のうち一人を失う）となっており、通分すればそれぞれ、百分の一、百分の十、百分の五十となり、だんだんと増加して行って最後が人間です。そして 16 章はこの最後の百分の五十を引き継いで、油百バトスを五十バトスに書き換えよと言っているように考えられます。15 章は失ったものを見出すことのたとえですが、16 章はお金が無くなったときにどうしたらいいかというたとえで、この続きには、金に執着するファリサイ派、金持ちとラザロという話があり、お金の話でつながっています。

ところで、主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめたとあります。聖書で不正な取引がほめられる？ まさかそういうことは

ないでしょう。そうするとその意味するところは何なのでしょうか。

4. 三つのたとえの比較

ここで、前の二つのたとえ、「仲間を赦さない家来のたとえ」と「金貸しのたとえ」を「不正な管理人のたとえ」と並べて見てみましょう。

マタイ 18 章		ルカ 7 章 41-50 節		ルカ 16 章 1-13 節	
仲間を赦さない家来の喩		金貸しのたとえ		不正な管理人のたとえ	
イエス → ペトロ		イエス → シモン		イエス → 弟子たち	
7×70の赦しの話の後		罪深い女を赦した後		放蕩息子のたとえの後	
借金の決済		借金の決済		会計の報告	
<div style="text-align: center;"> 王 ↓ 10000 タラント(帳消し) 家来 → 仲間 100 デナリ (要求) </div>		<div style="text-align: center;"> 金貸し ↓ ↓ 500 デナリ 50 デナリ 借金人A 借金人B (帳消し) (帳消し) </div>		<div style="text-align: center;"> 金持 ↓ 管理人 ↙ 100 バトス ↘ 100 コロス 商人A 商人B (残り) 50 (残り) 80 </div>	
10000 タラント	100 デナリオン	500 デナリオン	50 デナリオン	油 100 バトス	小麦 100 コロス
帳消し	返済要求	帳消し	帳消し	書き換え	書き換え
$\begin{array}{r} 10000 \\ -10000 \\ \hline 0 \end{array}$	$\begin{array}{r} 100 \\ \underline{100} \\ 100 \end{array}$	$\begin{array}{r} 500 \\ -500 \\ \hline 0 \end{array}$	$\begin{array}{r} 50 \\ -50 \\ \hline 0 \end{array}$	$\begin{array}{r} 100 \\ -50 \\ \hline 50 \end{array}$	$\begin{array}{r} 100 \\ -80 \\ \hline 20 \end{array}$
帳消 10000	要求 100%	帳消し 500	帳消し 50	差引き 50%	差引き 20%
貨幣単位は違う		貨幣単位は同じ		重量単位は違う	
<p>不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役</p>		<p>二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたし</p>		<p>主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子よりも賢くふるまっている。</p> <p>そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りな</p>	

<p>人に引き渡した。 あなたがたの一人一人 が、心から兄弟を赦さ ないなら、わたしの天 の父もあなたがたに同 じようになさるであろ う。</p>	<p>に示した愛の大きさに 分かる。 赦されることの少ない 者は、愛することも少 ない。</p>	<p>さい。そうしておけば、 金がなくなったとき、 あなたがたは永遠の住 まいに迎え入れてもら える。</p>
---	--	---

(1) 仲間を赦さない家来のたとえ (マタイ 18 章)

王の家来は王からは一万タラントンの借りがあるのに対し、自分の同僚に対しては百デナリオンの貸しがあります。王は一万タラントンの借金を帳消しにしてくれたのに対し、家来は同僚に百デナリオンを帳消しにせず返せと責めたてます。

タラントンとデナリオンは貨幣単位が違い、1 タラントンは 6000 デナリオンです。同単位に換算してみますと、家来の借金が 60000000 デナリオンであるのに対し、家来が貸しているお金は 100 デナリオンです。家来は 60000000 デナリオン帳消しにされているのに、同僚に貸した 100 デナリオンは赦さないのです。赦された 60 万分の 1 の金額を赦さないのです。自分の目にある大きな丸太には気づかず、兄弟の目にある小さなおが屑は赦さない話 (マタイ 7 章 3 節) に似ています。

王 → 10000 タラントンを貸す → 家来 → 100 デナリオンを貸す → 仲間
王 → 10000 タラントンを免除 → 家来 → 100 デナリオンを要求 → 仲間
(60000000 デナリオン) (100 デナリオン)

(2) 金貸しのたとえ (ルカ 7 章 41-50 節)

金貸しのたとえでは、どちらのお金を借りた人も借金が帳消しにされています。五百デナリオン借りた者は五百デナリオンを、五十デナリオン借りた者は五百デナリオンが帳消しにされています。十倍多く赦されるか、十分の一少く赦されるかの違いがあるだけで、どちらも帳消しにされています。ただその金額が違います。イエスが尋ねるのは、それでは赦された者のうちどちらの方が多く愛するだろうかということで、数量的に言えば勿論多く赦された方というのがイエスの答えです。重い病気をした人のほうが、それほど病気をしない人より健康をありがたく

思うのと同じでしょう。

金貸し ↗ 500 デナリオン → 借財人A → 500-500=0
 ↘ 50 デナリオン → 借財人B → 50-50=0

(3) 不正な管理人のたとえ (ルカ 16 章 1-13 節)

不正な管理人のたとえは上の二つのたとえとは少し違います。このたとえは借金ではなく、ある管理人が使い込みをして主人にそれがばれそうになったので、出入りの業者の伝票を書き換えるという話です。そうすれば解雇された時に、自分を雇ってくれるのではないかと自分の身を考慮のことがテーマとなっています。“do ut des” (あなたが与えるように私は与える) という見返りの原理がはたらいています。

不正な管理人は、油百バツスの借りがある者には、油五十バツスと書き換えさせ、小麦百コロス分の借りがある者には、小麦八十コロスと書き直させます。そうすればお金がなくなったとき、自分を雇ってくれるだろうと考えてのことです。重さの単位は、一バツスは一コロスの十分の一です。百バツスは十コロスであり、百コロスは千バツスです。単位は別でも数字はどちらも同じ百となっています。同じ単位に換算しますと以下のようになります。

油	$100 - 50 = 50$ バツス → $10 - 5 = 5$ コロス
小麦	$1000 - 800 = 200$ バツス ← $100 - 80 = 20$ コロス

三つのたとえ — それぞれの特徴 —

- ① 赦される金額が一番大きいのは、「仲間を赦さない家来のたとえ」です。デナリオンに換算してまとめると、家来は 60000000 デナリオンの借金が免除されたのに、仲間に対しては、100 デナリオンを赦さずに要求します。60 万倍です。それだけ赦してもらっているのにどうして赦さないのかということです。
- ② 「金貸しのたとえ」はお金を借りていた二人ともが赦される話ですが、問題は赦された者のどちらの方がより多く愛するかとこのころにあります。500 デナリオン免除された者と 50 デナリオン免除さ

れた者の比較ですから10倍の差です。愛を数量に換算することができるのかとも思われますが、10倍多く赦された者は10倍多く愛するというのはわかりやすい理屈です。

- ③ 「不正な管理人のたとえ」はまったくの帳消しではありません。まったくの帳消しにしてしまうとごまかしているのが明らかにばれてしまいますので適当に支払いを減らしています。減らすのは半分(50/100)と五分の一(20/100)です。こうして職を失ったときに何とか面倒見てもらおうという魂胆です。

V 赦しは不正？

この三つのたとえに共通するのはお金です。借金の返済ができなくて負債が帳消しにされる(しない)たとえと、管理人が借用証書を自分の都合のよいように書き換えてごまかすたとえですから、借金や借財が数字であらわされています。お金の貸し借りでは、一万円借りれば一万円返す、百万円借りれば百万円返すのが正義です。「目には目を、歯には歯を」と同じ原理です。正義はバランス、均衡が保たれることですので、数であらわすことができ、赦しはそのバランスがくずれることです。

ところで、「仲間を赦さない家来のたとえ」と「金貸しのたとえ」の理解のために、「不正な管理人のたとえ」を持ち出しました。借財をごまかすのは不正です。それなのになぜここで不正がほめられているのでしょうか。

正義が実現されていない状態は不正で、正義が実現されている状態が公正だということは当然です。問題は、正義は実現されていないがそれをよしとする場合です。これは正義ではありませんから不正です。ただ、不正と言ってもこれは正義を越えての不正と考えられます。

見えないと言う場合、光がなく暗くて見えないというのは普通ですが、明るすぎまぶしくて見えないということもあります。光の不足と過剰はものを見えなくさせます。それと同様に、正義に至らない場合は勿論不正ですが、正義を超えていると考えられる場合も不正ということができるのではないのでしょうか。「不正な管理人のたとえ」が言いたいことは、

勿論、不正がいいと言っているのではなく、人間はお互いにどこかで人を赦さないと生活してゆけないですよということではないかと思います。赦しは不正ですが、正義以上の関係である愛を成り立たせていると考えられます。愛は正義の完成だからです。

- (i) 正義が実現されていない状態＝不正
- (ii) 正義が実現されている状態＝公正
- (iii) 正義はないが是とされる状態＝不正（正義を越える愛）←赦し

聖書の中には神と人間のかけ引きの話があります。神はソドムの町が悪いために滅ぼそうとするのですが、それに対しアブラハムは、この町に50人の善人がいても滅ぼされるのですかと言います。神が50人の善人がいたら赦そうと答えます。そうするとアブラハムはもし45人でしたらともちかけ、さらに40人でしたら、30人でしたら、20人でしたら、10人でしたら、どうですかとかけ引きをしてゆきます。結局、神はこのかけ引き、よく言えばアブラハムの執り成しに応じます（創世記18章16節～）。

数字こそ使われませんが、モーセもやはり神とかけ引きをします。荒野の道でイスラエルの民が不平不満を言うと、神は彼らを捨てようと思えますが、それに対してモーセは神におどしをかけるようなことを言います。「もし、あなたがこの民を一挙に滅ぼされるならば、あなたの名声を聞いた諸国民は言うことでしょう。主は、与えると誓われた土地にこの民を連れて行くことができないので、荒れ野で彼らを殺したのだ、と。今、わが主の力を大いに現してください。あなたはこう約束されました。『主は、忍耐強く、慈しみに満ち、罪と背きを赦す方。しかし、罰すべき者を罰せずにはおかれず、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問われる方である』と。どうか、あなたの大きな慈しみのゆえに、また、エジプトからここに至るまで、この民を赦してこられたように、この民の罪を赦してください。」主は言われた。「あなたの言葉のゆえに、わたしは赦そう。」

モーセの執り成しといえば執り成しですが、これは一種の脅しのようなですね。

おわりに

罪とは言ってみれば負債、借金です。ですから、聖書では赦しの話の中でお金を使ったたとえが多く用いられているのだと考えられます。悪いことをした負い目があるというのは、負の借りがあるということです。

人間にとってわかりやすいのは、「目には目を、歯には歯を」の正義です。これは頭で考えてわかります。目をやられて相手を赦すのは正義ではなく不正義です。これは頭の問題ではなく心の問題です。なぜ赦すのがむづかしいかというと、赦すのは頭で考えてわかることではないからではないでしょうか。聖書に赦すことのたとえ話があるのは、少しでも頭でもわかってくださいよと言うためのように思われます。

赦すということが頭で割り切れないのは、日本語の「ゆるす」は、ゆるくする、ゆるめる、ゆるゆる、ゆるぐ、などの意味と関連し、おろそか=いいかげんの意味合いがあるからではないでしょうか。しかし、人間が生きてゆくためにはそうした幅の広さ、懐の深さが必要のように思われます。

「赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。」(ルカ 6章 37-38 節)